

# チャリティ活動などを通じて 復興支援をしていきたい

渡部美穂さん (b-ACTION代表)

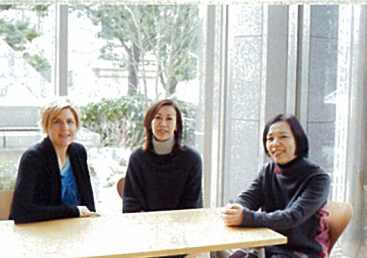


1969年、茨城県生まれ。チャリティレッスンなどの東北復興支援のためのボランティア活動を行うグループ、b-ACTIONの代表を務める。夫と9歳の男の子と3人暮らし。詳しくは<http://ameblo.jp/braveaction311/>

2011. 3.13	福島、宮城などの被災地に救援物資を届ける活動を開始
2011. 9.20	東北復興支援グループb-ACTIONを始動
2011. 9~12	アメリカのクリスチャンからの寄付により550台の暖房器具を手配

## チャリティ講座を開催して 収益の一部を東北に寄付

アロマセラピストの浅沼恭子さんを講師に、チャリティのアロマ講座を毎月開催。ほかにヨガやゴスペルフラダンスのクラス、コンサートなどを実施し、収益の一部を寄付金に活用。人々との出会いや交流を楽しみながら、支援を続けている



## 尊敬できる仲間の 存在も、活動の 原動力です

渡部さんとともにグループの中心で活躍する、アピ・ラウザーさん(左)と大谷紀美代さん(右)。近隣に住む二人とは支援活動を通して絆が深まった

現地のニーズに合わせた  
こまやかな支援を続けたい

「阪神・淡路大震災が起きたとき、仕事で被災地に行けなかったことをすごく後悔しました。だから東日本大震災のときは、クリスチャンのママ友に肩を押されたこともあって、すぐに活動を始めたんです」と語るのは、東北支援のボランティアグループ「b-ACTION」で、中核メンバーのひとりとして頑張っている渡部美穂さん。

震災直後から数台のトラックに物資を積んで被災地を訪ね、炊き出しを行うなど精力的なサポートを続けてきましたが、時間がたつにつれて、支援のあり方も少しずつ変わってきているそうです。

「2011年の6月ごろ、物がほぼ届くようになり、仮設住宅の建設も進み、ようやく一段落」という空気が漂いました。でも実際は、仮設住宅の孤独な暮らしに苦しむお年寄りが大勢いるし、陰では将来に不安を感じて自殺する若者も増えています。自ら声を上げることができ、人々には物資が届いているけど、そうできない人もいて、被災者間の格差が広がっていました。まだまだやるべきことはたくさんあって、本当に助けが必要な人のために私たちは活動を止めることができませんし、これからが大切な時期」

そこで渡部さんが考えたのが、各地の被災者の方に「リーダー」として活動してもらおうこと。

「被災した方たちが自分の手で復興を実現する、そのお手伝いをするのが、私たちの今後の役割だと思っています。現地で知り合った信頼できる方に地域のリーダーに



## ツアーやカキの 購入を通じて 現地の人々と交流

①石巻へは定期的に足を運ぶ。今年も1月に「石巻カキ鍋&炊き出しツアー」に参加。「東北の人たちは心が温かい。毎回、訪れる私のほうが励まされるし、元気をもらって帰ってきます。尊敬しています」

## 復興支援を通して、 家族の絆が強まりました

なってもらい、相談に応じて必要な物資やサービスにつなげる仕組みを作り、サポートさせていっています」

介護施設で働いた経験があり、社会活動に前向きな渡部さん。支援を通じて、「自分たちのほうが心の支えになる大切なものを、たくさんいいただきました」と語ります。

「被災地では、今なお大勢の海外ボランティアが活動しています。自国で起きたことのように支援してくれる彼らの姿を見ると、その行動力や持続力を私たちがもつて学ぶべきでは、と痛感します。ま



②1月のツアーには夫と息子も同行。「息子は、現地のボランティアスタッフが大好き。これからも、できるだけ被災地を訪れ、自分に何ができるかを考えさせたい」

③現在は東北漁業の支援が活動の中心。カキの季節には、同じマンションや近隣の住人に希望を募り、石巻からカキを取り寄せ頒布会を開く。「南三陸のカキは粒が大きくてジューシーで、本当においしいんです」(渡部さん)



た、今後の震災に備えて、自分たちが暮らすマンションや地域の防災体制の必要性を感じ、今、その整備に取り組んでいるところだ」

情熱と行動力がある渡部さんの周りにはいつも大勢の人が。そうした人たちとチャリティレクソンを行うなど、活動を展開する渡部さんを家族も応援しています。

「震災をきっかけに、夫がすぐ変わるんです。以前は、私が外に出ることをあまり快く思っていなかったけど(笑)、彼自身トラックを運転して東北に何度も出かけてくれる。息子と3人で石巻を訪ねることもあり、支援活動は家族の絆も強くしてくれましたね」